

●研究目的

① 間もなく半世紀が経過する「1968 年」ないしそれが象徴する広範に社会運動が高揚した「1960 年代」後半を回顧しその世界史的意義を検討しようという学術的な関心が近年国内外で高まっている（以下、本共同研究の立場として、「1968 年」の用語については、単なる年号を意味するものとしてではなく、研究者間で通例考えられているように、「1960 年代」の文脈の中で位置づける言葉として、また、「1968 年」前後の数年間の時代を総称するものとして使用する）。

「1960 年代」後半から展開された学生など若者を中心とする「異議申し立て」・「抗議運動」は欧米や日本など資本主義諸国で顕著であったが、社会を大きく揺り動かす変動は、チェコスロバキアや中国などの東側諸国や途上国でも見られた世界規模でのグローバルな現象であり、こうした運動・変動の頂点が時期的に「1968 年」であった。そして、「1968 年」「1960 年代」におけるこうした広範な社会運動・社会変動は、世界的な地域的広がりを持つと同時に、政治・社会の側面のみならず、既成の価値観への挑戦やライフスタイルの変容など、文化的な側面にまで影響が及んだという点で大きな歴史的意義を持つものであった。

このような歴史的意義を持つ「1968 年」「1960 年代」に関しては、近年、歴史研究の対象として相応しい時間の経過と相俟って、今や高齢期に至った当事者による出版物が出され、当時の状況を直接知らない次世代の研究者を含む学術出版が相次いでいる。日本だけに限定してみても、当事者による出版物として山本義隆『私の 1960 年代』（金曜日、2015 年）などが、学術出版としては、油井大三郎編『越境する 1960 年代—米国・日本・西欧の国際比較—』（彩流社、2012 年）や梅崎透・西田慎編『グローバル・ヒストリーとしての「1968 年」—世界が揺れた転換点—』（ミネルヴァ書房、2015 年）がそれぞれ刊行されている。

そして、とくに上記の学術出版では、「1968 年」「1960 年代」を考えるうえで以下の二つの論点が提示されている。第一に、「1968 年」「1960 年代」における諸運動は、世界的な規模で、各国の社会運動間のみならず、国境を越えて各国の社会運動が相互に影響し合い、政治・社会運動と文化変容に影響を及ぼしたという点で、「グローバル性」、「トランスナショナルな連関」を特徴としていた点である。第二に、「1968 年」は、現在がどのように形成されたかを考える場合の一つの起源や転換点をなす時期であることや、ひいては、巨視的な視点に立った場合、近代以降の歴史の相対化が迫られた時期でもあるという意味で、近代から現代への「世界史の転換点」であったことである（上記の二点の論点に関しては、前掲『グローバル・ヒストリーとしての「1968 年」—世界が揺れた転換点—』、序章参照）。

② 本共同研究は、「1968 年」「1960 年代」に関する先行研究で提示されている以上の論点をふまえつつ、学内のアメリカ、ラテンアメリカ、ドイツ、フランス、中国、台湾、日本を研究対象領域とする諸教員を中心に、学外から適宜研究者ないし当事者を招聘して、50 周年を間近に控えた「1968 年」の世界史的意義の検討を行い、一つの書物としてまとめ上げ、近年の国際的学術論争の深化発展に資することを目的とする。

③ 本共同研究企画の学術的意義は以下の二点にある。

(1) とくに日本における「1968年」「1960年代」研究は、主として歴史学、政治学、社会学の学問分野の研究者が主導的役割を果たしてきており、これまで「1968年」が及ぼした文化的・思想的影響の側面に関しては必ずしも十分な掘り下げがなされているとは言えない。これに対し、本共同研究の分担研究者には、文化人類学、思想史、文化地理学、地域・民俗論、日本文化学、文学など文化的・思想的側面を学問分野とする研究者が参加しており、本共同研究は、これまで研究史上、手薄であった文化的・思想的影響について新たな知見を提供するとともに、歴史学、政治学、国際関係学を専門とする分担研究者との学際的なコラボレーションをもとにして、文化・思想の側面も含めた、「1968年」の意義に関する総合的研究を行うことに独創性がある。

また、日本における「1968年」「1960年代」に関する学術的な共同研究としては、管見の限り、油井大三郎氏を研究代表者とする科学研究補助金（科研）による共同研究（この成果が、上記の『越境する 1960 年代—米国・日本・西欧の国際比較—』）があるが、研究対象は欧米と日本であり、それら以外の地域はカバーされていない。これに対し、本共同研究には、ラテンアメリカや中国、台湾を研究対象領域とする研究者が加わっており、欧米以外の途上国や社会主義国の地域も射程に入れた地域横断的な共同研究であることに独自性がある（前掲『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」—世界が揺れた転換点—』では、中国やチェコスロバキアについての章があるが、本書は「共同研究」の成果というよりは、各地域の研究者による寄稿論文によりまとめられたものである）。

南山大学の四地域研究センターによる共同研究では、これまで学際的、地域横断的な研究が蓄積されてきている。本共同研究は、こうした地域研究の蓄積と特性を生かし、学際的、地域横断的な研究を進め、「時代の転換点」を画する「1968年」の意義に関する新たな知見を提供することで、「1968年」「1960年代」研究の研究水準を引き上げることを課題とする。

(2) 上記で述べたように、今や高齢期に至った当事者による出版物が出されているが、従来研究者側から当事者と対話の機会を設け、「1968年」「1960年代」研究を豊富化する試みはあまり行われているとは言いがたい。そこで、本共同研究では、日本に限定してではあるが、学生運動やベトナム反戦運動、新聞などのメディア、そして音楽を含む芸術・文化の面で「1968年」を象徴し、学生をはじめとする若者ならびに一般市民に大きな影響を与えた当事者を何人か招聘することで、日本にとって「1968年」がどのような意味をもったのかについて、当事者の視点も組み入れた共同研究を遂行する。本共同研究における研究会合でのこれら当事者の報告については、文字化して記録として残すことを考えており、当事者の証言記録をもとに「1968年」「1960年代」研究が今後深化し得る研究環境を提供することも、本共同研究が目的とする積極的貢献の一つである、同時に、本共同研究の過程では、「1968年」研究をリードする日本の研究者も招聘すること

で、本共同研究が「1968 年」研究の最先端にある研究者との研究交流の場ともなることも目的としている。

以上、本共同研究は、「1968 年」「1960 年代」における社会運動・社会変動が「グローバル性」と「トランスナショナルな連関」の特徴を持ち、しかも「世界史の転換点」の意味を有するとの先行研究で提示された論点を深化・発展させる視点から、最先端の関連研究者との研究交流や当事者との意見交換の機会を設けることを含め、「1968 年」の意義に関する総合的研究を学際的、地域横断的な形で進めることで、「1968 年」から 50 周年を迎える 2018 年を射程に、「1968 年」「1960 年代」研究の水準を高めることを目的とするものであり、この点に大きな研究上の意義があると考ええる。

●研究概要

■研究計画・方法

1. 本共同研究における共同研究の進め方：

本共同研究においては、次のような形で進める。

分担研究者は当初 2 年間で原則 1 回ずつの研究報告を行う。また、「1968 年」研究をリードする最先端の研究者を当初 2 年間で原則 3 名（1 年目には 2 名、2 年目に 1 名）招聘して、「1968 年」「1960 年代」の意義について知見を得ることで、その意義について分担研究者間で共有を図る。また、「1968 年」関連の当事者を 4 名（毎年 2 名）招き、同時代体験を聞くことで、「1968 年」が与えた影響について当事者と意見交換に機会を持つ。これら当事者の報告についてはテープ起こしをして証言記録として残す。

そして、第 1 年度末と第 2 年度末には報告書をまとめ、最終年度には書籍の形で学術成果を公刊する。

2. 各年度における研究計画・方法：

2016 年度：「1968 年」の意義についての全般的検討

- ・春学期中に最初の研究会合を持ち、本共同研究の意義と目的、そして 3 か年の研究計画、さらには購入する書籍、2016 年度の研究会合の開催日程等について共有する機会を設ける。

- ・2016 年度は「1968 年」の意義についての全般的検討を行う。そのため、「1968 年」研究をリードする研究者 2 名を招聘して「1968 年」研究の意義について全般的に検討し、問題の所在について討論を行い、共同研究にあたっての問題意識の共有を図る。また、「1968 年」研究に比較的近い研究を行ってきた分担研究者による個別の研究発表を行う。さらに「1968 年」に関連する当事者 2 名を招き、当事者の報告をもとに「1968 年」が与えた影響について意見交換を行う。

- ・研究会合を年間 5 回設ける。

研究会合にあたっては、分担研究者による研究発表、学外研究者や当事者による報告を適宜、組み合わせる。

- ・年度末に学外研究者と当事者の報告を含めて報告書をまとめる。

2017 年度：各国・地域における「1968 年」の歴史的意味に関する総合的研究

・2017 年度は、2016 年度における「1968 年」の意義についての全般的検討をふまえ、分担研究者による個別発表を中心に、各国・地域における「1968 年」の歴史的意味に関する総合的研究を行う。

・「1968 年」研究をリードする研究者 1 名を招聘して「1968 年」研究の歴史的意味について討論を行うとともに、「1968 年」に関連する当事者 2 名を招き、当事者の報告をもとに「1968 年」が与えた影響について引き続き意見交換を行う。

- ・研究会合を年間 5 回設ける。

2016 年度と同様、研究会合にあたっては、分担研究者による個別研究発表、学外研究者による報告、当事者による報告を適宜、組み合わせる。

- ・2016 年度と同様、年度末に学外研究者と当事者の報告を含めて報告書をまとめる。

2018 年度：書籍の形での学術成果の公刊に向けた準備作業。

- ・2016 年度と 2017 年度における検討をもとに、分担研究者が各自、研究論文をまとめる。

・年度末までに、書籍の形で学術成果を公刊する（学外研究者ならびに当事者の報告については、可能な限り書籍の中に組み入れる）。

■今回の研究計画を実施するにあたっての準備状況等

① 本学の四つの地域研究センターおよび図書館、さらに分担研究者の教員所蔵の文献を活用する。研究分担者による研究発表、学外研究者や当事者による報告によって構成される研究会合の開催は本学の教室を使用する。

② 学内の分担研究者となる予定の教員は各領域で関連研究および本共同研究を実行する上で十分な学問業績を蓄積しており、またこの共同研究の意義に賛同している。学外研究分担者に関しては、本共同研究の実施が決定した後で交渉を開始する。

③ 毎回の研究会合を学内外に公開し、第 1 および第 2 年度の成果は報告書にまとめ、最終年度には一冊の書籍に成果をまとめて公刊する。